

漢文学習の意義

——協議会のまとめ——

田中俊弥

「高等學校における漢文の指導」という主題のもとに協議会が開催されたのが一九八八年の第二九回学会のときで、漢文にかかわる協議会はそれ以来ということになる。

この間、学習指導要領の改訂があり、高等學校においては、新設科目として、「古典Ⅰ」「古典Ⅱ」「古典講読」「現代語が設けられ、平成六年度（一九九四年四月）入学の生徒から新課程が全面的に実施されることになった。今回の協議会は、そうした情勢の変化も視野に入れつつ設定されたものであり、漢文教育、というよりも漢文を学習することの意義があらためて問われることとなった。

「教科書に漢文があるから漢文を学習する」「大学の入学試験に漢文の問題が出題されるから漢文を学習する」といった地点を抜け出さないかぎり、漢文学習のほんとうの意義はみえてこないのではないか。三人の提案に共通するものは、そうした問題意識だったようにおもふ。秋元氏は、「今こそ漢文教育が必要とされなければならぬ時期」だととらえ、学習者自らの興味関心の問題意識に組織しながら、それを核とした漢文学習の場が学習者の生き方を問う契機になりうることを提案された。永菜氏は、「現在のみを羨しむ高校生たちの生活の中に古典を投げ込んでみたい」「彼らの認識を少しでも広げ、現在を見直させるきっかけにしたい」というおもいに発した実践を報告され、現在の学習者の生活に深くかかわっている言語文化として漢文の意義を

明らかにされた。阿武氏は、「何のために漢文を学ぶのか（字はせるのか）」を問いなおし、文学教材としての価値を提起され、学習者の表現活動に連結していく漢文学習の意義を提起された。また、その質疑においては、そもそも漢文とは何かという根本の問題も論議され、漢文との出会いをどこに求め、漢文への親しみはどのように育てられていくべきなのかという問題に対して積極的な提言がなされた。とくに長谷川滋成先生からは、「漢文でないといけないこと」を内容的な側面と修辭的な側面の両面にわたって示唆いただいた。

たしかに、現在のわたしたちにとつて、大半のものは、漢文そのものの隔絶感が強い。しかし、一方で、三國志、史記、論語、韓非子、漢詩など、すぐれた作家や学者、ある場合には漫画家やゲームソフトの開発者の作品を通し、幅広く親しまれ、人生をゆたかにしていく糧として漢文は享受されている。こうした現実をふまえるならば、要は、漢文をどのようなものとしてとらえるか、すなわち漢文観の問題に帰するのではないかとおもふ。かつては知識階級の専有物であった漢文を漢字文化圏の言語文化として機能させていくところに漢文学習の意義はたしかに見出されていくのではないか。具体性にかけた立論ではあるが、これもつて本協議会のまとめとしたい。

（大阪教育大学）